

近代的農業水利施設を整備

本地域は、一級河川吉井川を取水源とする広域の農業地域ですが、瀬戸内海型気候に属するため、年間降水量は1,200mm程度と少なく、昔から用水不足に悩まされてきました。このため、およそ300年前の江戸時代から井堰など多くの農業水利施設が造られてきましたが、施設の老朽化が著しく、近代的な施設への整備による用水の安定供給が望まれるようになりました。

そこで農林水産省は、昭和45年度から昭和63年度にかけて国営吉井川農業水利事業により基幹的な施設の整備を実施し、これと併せて、ため池や天水に依存していた畑作地帯へのかんがい施設整備を実施しました。

このことにより、国営事業で整備された新田原井堰、坂根合同堰、幹線用水路、畑地かんがい施設等により安定的な用水供給が確保され、現在、本地域では水稻をはじめ、大豆、麦、野菜、果樹等の主要な産地が形成されています。

前歴の事業概要

関係市町	岡山市、備前市、瀬戸内市、赤磐市、和気郡和気町（4市1町） （事業当時の市町：岡山市、備前市、赤磐郡瀬戸町、熊山町、和気郡和気町、邑久郡牛窓町、邑久町、長船町；2市6町）
受益面積	6,930ha（昭和55年12月時点）
総事業費	約351億円
事業工期	昭和45年度～昭和63年度
事業内容	新田原井堰：1箇所、坂根合同堰：1箇所、 幹線用水路：L＝47.7km、揚水機場5箇所、 畑かん専用水路：L＝19.2km、水管理施設：1式

農業水利施設



▲新田原井堰



▲坂根合同堰



▲田原用水路



▲大用水路



▲太伯朝日揚水機場



▲弁天ファームpond

地域の営農

水 稻



乾田直播の播種風景



播種後約1ヶ月
（入水前）

吉井川地区の約3割で乾田直播が行われており、作業の省力化が図られています。

二条大麦



水稻の裏作として栽培され、ビール原料として出荷されています。吉井川地区で県内作付面積の約2割を占めています。

ぶどう



吉井川地区は岡山県の主産地であり、県内作付面積の約2割を占めています。

野 菜



畑作地帯では、畑地かんがい施設を利用したはくさいやかぼちゃ等の野菜栽培が盛んです。

吉井川地区の農業水利施設

新田原井堰

吉井川地区全体の代かき期の用水を確保するために、田原井堰があった場所に有効貯水量200万 m^3 の新田原井堰を計画し、昭和54年度に工事着手、昭和61年度に完成しました。



▲下流上空から上流に向かって撮影



▲右岸下流側から撮影

形 式	フローティングタイプ全可動堰	
堤 高	8.2 m	
堤 長	220.0 m	
総 貯 水 量	2,120 千 m^3	
有 効 貯 水 量	2,000 千 m^3	
計 画 洪 水 量	7,500 m^3/s	
最 大 取 水 量	農業用水	4.74 m^3/s
最 大 放 流 量	農業用水	25.14 m^3/s
可 動 部	洪水吐水門	径間 40.4 m×高 8.2 m×3 門
	調整水門	径間 40.4 m×高 8.2 m×2 門
取 水 施 設	左岸(和気用水)	1.5 m×1 門
	右岸(田原用水)	2.7 m×2 門
管 理 者	岡山県	

坂根合同堰

坂根堰、吉井堰を統合し、坂根堰のあった場所に新たな水の取り入れ口として、建設省（現国土交通省）、農林水産省、岡山県（上水道、工業用水の共同代理人）の3者の共同事業により坂根合同堰を計画し、昭和48年度に工事着手、昭和54年度に完成しました。



▲下流上空から上流に向かって撮影



▲右岸下流側から撮影

形 式	フローティングタイプ全可動堰	
堤 高	4.9 m	
堤 長	279.2 m	
総 貯 水 量	2,200 千 m^3	
有 効 貯 水 量	1,600 千 m^3	
不 特 定 容 量	600 千 m^3	
都 市 用 水 容 量	1,000 千 m^3	
最 大 取 水 量	農業用水	18.00 m^3/s
可 動 部	洪水吐水門	径間 42.0 m×高 4.9 m×5 門
	土砂吐水門	径間 30.0 m×高 4.9 m×1 門
		径間 20.0 m×高 4.9 m×1 門
取 水 施 設	左岸(大用水)	5.6 m×2 門
	右岸(倉安川用水)	2.7 m×1 門
管 理 者	国土交通省	